

エピソードと「美談」で難民問題を理解することはできない

盛田 常夫

転倒した父子の「美談」

9月19日、サッカースペインリーグのレアルマドリッドの試合開始にあたって、ロナウドがシリア人の子供の手を引いて入場した。その子はハンガリーで父親と共に警官に押し倒されてニュースになった難民の子供で、レアルマドリッドは「難民」との連帯を示すために、ロナウドとの入場というご褒美を与えたようだ。

このエピソードの始まりは、CNNの配信ニュースである。「ハンガリーで幼い息子を抱えて国境を目指すさなか、地元の女性カメラマンに足をかけられ、転倒させられたシリア人難民の男性が、事件をきっかけにスペインで新たな生活を始めることになった」（日本語版の引用）と世界に配信している。

このニュースによって、ハンガリーは難民を虐待していると、世界を敵に回すことになった。ビデオを良く見ると、確かにビデオ撮影の女性は現場にいるが、この父子は警官に肩を押され、その勢いで畑の盛り土に足を取られて転倒している。女性のビデオ撮影者は父子が転倒する直前に足を出しているが、この父子には届いていない。もちろん、件の女性はこれ以外にも、逃げる少女を足で止めようとするなど、ジャーナリストとして許されない行動をとっている。しかし、この女性の行動がことさらに大きく報道された結果、難民問題の本質が完全に見逃されることになった。

どのメディアも、この状況がどのようにして発生したのかをまったく伝えていない。CNNは、「国境を目指すさなか」と書いているが、これは間違いである。ハンガリー国境を不法に侵入した難民が、警官の拘束（難民収容所への連行）を逃れるために、逃げ出したところを世界のメディアが映し出したものである。

難民と不法入国

ハンガリーはここ8ヶ月、ギリシア、セルビアを経由してハンガリーに不法入国する難民の取り扱いに対処してきた。この8月から9月にかけての難民大移動以前に、ハンガリーは今年すでに20万人の合法あるいは不法に入国する「難民」に対応してきた。ハンガリーがとった措置は、二つの国際条約の義務に従ったものである。

一つは難民の取り扱いを決めた「ダブリン条約」にもとづく難民対処であり、もう一つはEUの自由移動圏の境界を定めた「シェンゲン条約」にもとづく国境管理である。前者は難民認定作業を行うことを定めたものであり、後者はEU自由移動圏への入国管理を定めたものである。

シェンゲン条約のヨーロッパ南東の境界であるハンガリーは、ウクライナ、ルーマニア、セルビア、クロアチアの非シェンゲン条約国から入国する人々を、厳格に管理することが求められている。ルーマニアとクロアチアはEU加盟国であるが、シェンゲン条約国ではな

い。この二つの国はシェンゲン条約国に「昇格」するために、国境管理の厳格化を試運転しており、クロアチアはこの7月にシェンゲン条約加盟の申請を行っている。

ハンガリーと非シェンゲン条約国との国境には、「ここはシェンゲン条約国ハンガリーの国境であり、指定の検問所を通過しない国境通行は不法入国となる」という看板が設置されている。ハンガリーはこの夏から急増した難民に対処するために、セルビア国境に鉄条網を設置してきたが、そのフェンスを破ることは難しくない。ハンガリーにとって、検問所に押し寄せる難民のみならず、検問所以外の200km近いセルビアとの国境線を破って、不法に入国する人々の対処に迫られてきた。

他方、セルビアからハンガリーに押し寄せる難民たちは、警官に捕まって国外に送還されることを恐れて、難民収容所へ誘導されるのを嫌い、警官の制止を振り切って逃げようとする。国境管理を厳しくした直後に発生した難民拘束事例が、世界の報道陣に撮影され、世界中に配信された。

合法・不法入国を問わず、ハンガリーに入国した難民は、ハンガリーで登録されなければならない。これが「ダブリン条約」の規定である。そしてその規定にしたがって、ハンガリーは難民に対処してきた。しかし、世界のメディアはそのことを伝えることなく、特殊な状況で生じた不幸な出来事があたかもすべてを表現しているかのように伝え、難民への同情を呼び起こし、ハンガリーの対応を非難することになった。

それでは、ハンガリーは不法に入国する難民にどう対処すべきなのか。その点についてメディアはなにも語らない。これではあまりに不公平ではないか。ここ数週間ではなく、8ヶ月にわたって難民に対処してきたハンガリーの努力を伝えることなく、ハンガリーを非難すれば難民問題が解決するかのような報道は虚偽の報道である。現在の「難民」問題はお涙頂戴の人道支援で解決できるようなものではない。

シリア、イラク、アフガンのほか、さまざまな国の人々が、一緒になってヨーロッパへ入り、生活の糧を得ようとしているのだから、厳密な「政治難民」のカテゴリーに当てはまる人は極めて少数である。「難民」の中核となるシリア人すら、「難民」の3割以下だといわれている。その実態に即して、ハンガリーではもはや「難民」と呼ばずに、「移民者」と読み替え始めている。

なぜハンガリーだけが非難されるのか

ハンガリーがことさら非難の対象になる理由は二つである。一つはまさに難民が到着するシェンゲン条約国として矢面に立っているからである。本来は、難民のEU到着国であるギリシアで難民登録されなければならないが、ギリシアがその仕事を事実上、放棄しているので、その仕事まるまるハンガリーに押しつけられている。二つは、ハンガリーの現政権は、周辺国のみならず、西欧諸国との関係が良くないことである。

長い国境線を共有するセルビアは、残虐な国内戦争を終結して、それほどの時間が経っていない。内戦後には、コソボ独立問題で、首都に爆撃を受けた国である。ヨーロッパ大陸に

ありながら、いまだ EU に加盟できない理由は数え切れないほどある。ハンガリー国境に近いセルビア領内には、ハンガリー人が多数居住しており、セルビアはハンガリー人少数民族問題を抱えている。したがって、セルビアとハンガリーの外交関係はとても良好とはいえない。

セルビアはクロアチアとの内戦やコソボ紛争に、ハンガリー人少数民族から徴兵して、一石二鳥で民族問題を解決しようとした経緯もある。今回の難民問題でも、セルビアは国家として難民対処を一切おこなわず、マケドニア国境からハンガリー国境へ難民を輸送するだけである。しかも、それは人道支援としてではなく、難民からバス料金を徴収する政府公認の有料ビジネスとして展開している。口ではハンガリーの国境フェンス設置を、19世紀の暗黒時代に引き戻すものと批判しているが、難民を厄介払いするかのよう、ハンガリー国境に集結させるだけの仕事を行っている。

クロアチアの現政府とハンガリー政府は、ハンガリーのガス石油会社（MOL）のクロアチア企業民営化にあたって、MOL社役員とクロアチア前政府要人との間で贈収賄があったとして、MOL社幹部の引き渡しを求めるなど、ぎくしゃくした関係にある。そのため、ハンガリーがセルビア国境にフェンスを構築した際も、セルビアと同調してハンガリーを非難し、クロアチアが難民を受け入れることに何の問題もないと見栄を張ってきた。しかし、実際に難民がクロアチアに迂回し始めた途端、1日半でその姿勢が崩れてしまったことは周知の事実である。

現在のところ、ルーマニア国境からの難民流入は見られないが、ルーマニアのハンガリー人少数民族問題は、チャウシェスク独裁時代から続く深刻な問題であり、両国の関係はお世辞にも良いとは言えない。

ハンガリーと国境を接するオーストリアの東の地域（ブルゲンランド）には第一次大戦や第二次大戦で母国から切り離されたハンガリー人が多く住んでいる。1956年動乱でオーストリアに亡命し、ウィーンのマスメディア界の重鎮になったポール・レンドヴァイは、ハンガリー社会党政権（ジュルチャーニイ）時代に、補助金を受けて書籍を出版するなど、社会党の政治家と親密な関係を築いてきた。だから、社会党に代わって政権を担っている現在のハンガリーの右派民族主義的政権を、事ある度に激しく批判している。レンドヴァイの入れ知恵で、オーストリア社会民主党政権もまた、ことある度に、ハンガリー首相オルバンを批判するのが恒例行事になっている。だから、大量難民が押し寄せた9月に、オーストリア行きの最初の列車を出発させたハンガリーが列車を途中で止め、難民を収容所に誘導したことを、ナチスの収容所行きに例えて批判した。だが、オーストリアも同じことをせざるを得ない羽目に陥ったことは、すでに記した通りである。

ハンガリーに国境を接しない国のメディアからもハンガリー批判が行われるのは、ハンガリーの右派民族主義政権は、社会民主主義の西欧の伝統に反するものだという「常識」によるものである。ハンガリーを訪問したこともないジャーナリストが、「恐怖と無知におびえる中東欧」などと知ったかぶりに批判するのは、それこそ嘔飯物である。

「難民に催涙弾」の作り話

ハンガリーがセルビアとの国境検問所（リュスケーホルゴシュ国境）を閉鎖した 9 月 15 日の翌日、国境開放を求める数十名の難民集団が、投石を始めて国境の門扉と鉄条網を破壊し始めた。門扉が壊され、ハンガリー側は装甲車から断続的な放水を行い対抗したが、破壊行動が収まらないので催涙弾が発射された。国境線から 10m~15m の地帯での出来事である。

ところが、国際メディアは国境線の狭い地帯で起きている出来事を配信するのではなく、催涙弾の影響で涙を流す少女を撮影し、「ハンガリーは放水と催涙弾で難民を攻撃・排斥している」というニュースを流した。また、難民を厄介払いしたいセルビア政府は、ハンガリーの対応はセルビアへの野蛮な攻撃であり、国際的に批判されるべき行動だとハンガリーを批判した。足蹴りのハンガリー人女性撮影者の報道からそれほど間もない出来事で、「無慈悲なハンガリーなら然もありなん」という難民への同情とハンガリー批判を増幅させることになった。

ハンガリーのテレビはこの事件の様子を、セルビア側から撮影した映像で見せている。この国境地帯の狭い地帯で生じた衝突のビデオのなかに、婦女子はいない。数十名の男子が、入れ替わり立ち替わり、投石を繰り返し、門扉を足蹴にする状況が見えるだけである。催涙弾のガスが流れて、遠くでこの出来事を見守っていた人々が涙腺を冒される被害を受けた可能性はあるが、衝突そのものは非常に狭い地帯の攻防に過ぎなかった。しかし、国際メディアは難民を狙った無慈悲で残酷な仕打ちとして、世界に配信したのである。

この検問所襲撃にあたっては、ハンドスピーカーをもった男が 2 名、繰り返しハンガリーを批判し、検問所襲撃を煽っている。このハンドスピーカーはどうやって入手したのだろうか。まさか、シリアやイラク、あるいはアフガニスタンから持ち込んだはずはないだろう。だとすれば、どこから入手したのか。セルビアの警官から借りたと考えるしかない。

この検問所襲撃にあたって、セルビア側の警察は何の措置もとらず、傍観するのみだった。厄介払いするように、難民は早くハンガリー側に送り出すのが一番と考えているから、難民が暴徒化して、検問所を突破しても、セルビアには何の痛みもない。

「EU に加盟していないから、俺たちは知らないよ」というのが、セルビアの態度だ。難民をマケドニア国境からハンガリー国境へ運ぶことだけをせっせとやっている。とにかく、可能な限り短期間で、難民を他国に押し出すのが、セルビアの仕事になっている。

この国境での出来事後、ハンガリー政府は検問所襲撃を煽った人物の顔写真を公開し、国際的なテロリスト組織との関係がないかどうか、関係国に問い合わせている。その後、首謀者 2 名を含む検問所襲撃に加わった人物 9 名が、ハンガリー国内を移動中に拘束されたと報道されているが、その詳細は公表されていない。

クロアチアの混乱

9月15日のセルビアーハンガリー国境閉鎖に伴って、難民は隣国クロアチアへ移動した。当初、クロアチアはダブリン条約のもとで難民登録を実施するために、難民の収容を始めたが、次から次へとセルビアから送り込まれてくる万を超える難民に対応できず、受入れから2日も経たないうちに国境管理と難民登録を放棄してしまった。セルビアに難民を留める措置を要請したが、セルビアは一切聞く耳を持たなかった。残虐な殺し合いを終えて、それほど時間が経ってない二つの国である。セルビアにとって、クロアチアの窮状を喜ぶことはあっても、助けるなど論外である。

クロアチアの混乱から、メルケル首相がクロアチア首相と電話会談したと報道されている。メルケル首相はクロアチアに2万人の難民を引き受けることを要請したようだが、収容能力がないという理由で、クロアチアはメルケル首相の要請を断った。

この後、クロアチアは難民をハンガリー国境とスロベニア国境に、バスと列車で送り出すことを決めた。この輸送すら待ちきれない難民たちが、タクシーで国境に向かうことも容認することになり、セルビアのような難民輸送ビジネスが始まった。政府が運行するバスは無料のようだが、タクシーは無料ではない。

ハンガリー国境ではハンガリー政府がバスを用意し、クロアチア国内からバスで次々と到着する難民の乗換え作業を行っている。ハンガリーでは難民をいったん収容所に運ぶが、難民審査することなく、登録だけ済ませてオーストリア国境に送り出している。なにしろ、1日5千人もの難民が押し寄せているから、飲料や食料の支給や登録処理だけでもたいへんで、難民審査ができる状況にない。

現在、ハンガリーでの登録を済ませた難民はオーストリアとの国境（ヘジェシュハーロームーニッケルスドルフ）に送られているが、オーストリアは数千人の難民を、いったん昔の国境検問地帯にある貨物トラックの広大な駐車場に留め置き、そこからオーストリア各地の難民収容所に運んでいる。しかし、1日数千人単位で到着する「難民」をいつまで受け入れることができるのか、ドイツへの出国をスムーズに行えるのか、収容能力と時間との競争になっている。

こうして、ハンガリーが一手に引き受けていた難民問題は、周辺国すべてが当事者になることで、負担が拡散されている。関係国の処理能力を遙かに超える移民者の流入をどうやって食い止めることができるのか。その根本的な政策措置が急がれる。当事者の国々にとって、「難民」をめぐるエピソードや「美談」に一喜一憂している余裕などない。

(2015年9月21日)